

7. リモージュの市場 (Limoges, Le marche)

この絵は特定されていません。フランス中部の都市リモージュで書かれたハルトマンのスケッチが14枚残っていて、あるいはこれらが該当するのかもしれませんが。ムソルグスキーは楽譜の中に「女たちが喧嘩をしている。激しく激昂してつかみかからんばかりに」と書いています。小刻みな16分音符が絶え間なく奏され女たちのおしゃべりの様子が描かれています。切れ目なく次の曲につながります。



8. カタコンブ、ローマ時代の墓 (Catacombes, Sepulchrum Romanum)

パリにある地下墓地、夥しい数の頭蓋骨が描かれています。ハルトマンはヴィクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』のカタコンブの描写に基づいてこの絵を描いていて、カンテラを持っているのはハルトマン自身とされています。ほとんど和音だけで作られている曲で、ラヴェルは金管を中心にして和音を作り、それに木管とコントラバスを添えています。



死者とともに死者の言葉で (Cum mortuis in lingua mortua)

高音域での弦のトレモロをバックにプロムナードの主題の変奏を行ないます。墓場の後に「プロムナード＝散歩」という軽い言い方は気が引けたのでしょうか。それと『カタコンブ』でハルトマンの死を直視したムソルグスキーは言葉にならない自分の気持ちをここで伝えようとしたのかもしれませんが。

9. 鶏の足の上に建つバーバ・ヤーガの小屋 (La cabane sur des pattes de poule - Baba-Yaga)

これは鉛筆で描かれた時計のデザインです。ロシアの伝説に登場する魔女バーバ・ヤーガは深い森の奥の人骨の柵に囲まれた空き地にある、鶏の足の上に立つ小屋に住み、臼に乗って杵でこぎ、ほうきで跡を消しながら現れます。ハルトマンはそのバーバ・ヤーガの小屋を時計にしてデザインしています。音楽はその小屋の形をした時計というよりはバーバ・ヤーガそのものを描写しています。激しく叩きつけるような動機で開始され、何物かが動き始めてやがて巨大に膨れ上がり猛スピードで駆け巡るさまを描いています。

10. キエフの大門 (La grande porte de Kiev)

ウクライナ共和国のキエフにはかつて壮麗な「黄金の門」がありましたが、ハルトマンの時代には破壊されまみになっていました。1869年、キエフ市が募集した門の再建コンテストに応募し、好評を博します。しかし何故か門の再建計画は中断されてしまいます。現在は1982年に復元された門を見ることができますが、もちろんハルトマンのデザインではありません。

ハルトマンの絵は、細密画のようにかつ設計図のように極めて細かい筆致で描かれ、スラヴ風のアーチ状の屋根を持ち、門には鐘楼と教会がついています。音楽はコラールが繰り返され、鐘と聖歌隊の歌がこだまするように絢爛たる情景を描いています。



現在のキエフにある「黄金の門」



ここで10曲のハルトマンの絵に関わる場所を順番に見ると、グノーム＝ロシアの伝説、イタリアの古城、パリのテュルリー公園、ポーランドの牛車、ペテルブルグのバレエ（題材はフランス）、ポーランドのサンドミールのユダヤ人たち、フランスのリモージュの女たち、パリの地下墓地、ロシアの森、キエフの大門ということになり、ムソルグスキーのいるロシアは2つありますが、どちらも伝説上の生き物になっています。その他はイタリア、フランス、ポーランドとハルトマンがコンクール優勝のご褒美で旅した国で描いた絵です。最後のキエフがムソルグスキーにとっては異国という認識だった（後年ウクライナの題材を用いたオペラの作曲を計画しますが、ロシア人であるムソルグスキーはウクライナ風の歌唱、言葉の微妙なニュアンスや特色を会得できないとしてその計画を断念します。）とすれば、4カ国の情景を描いた絵が400点以上もあったハルトマンの遺作から選ばれていることになります。絵を選ぶとき、ムソルグスキーに何か意図するものがあつたのでしょうか。今後の研究に期待したいと思います。

<http://www.asahi-net.or.jp/~wg6m-mykw/index.htm>

参考文献：

『ムソルグスキー その作品と生涯』アビゾフ著 伊集院俊隆訳 新読書社
『追跡 ムソルグスキー「展覧会の絵」』 団伊玖磨著 日本放送出版協会